

豚の人工哺育方式による慢性疾病の清浄化

遠目塚敏男・泉 道雄・森 弘・*寺原重昌・**恒吉 守

(宮崎県畜産試験場川南支場・*宮崎県北部食肉衛生検査所・**宮崎県宮崎家畜保健衛生所)

Toshio TOMETSUKA, Michio IZUMI, Hiromu MORI, Shigemasa TERAHARA and Mamoru TUNEYOSHI :
Artificial Rearing System as a Tool to Establish a Minimum Chronic Disease Pig Herd

養豚の疾病清浄化の手段として、現行のSPF方式に替わる低コストで簡易な清浄豚作出技術の確立を目指して、普通分娩による人工哺育方式の検討を行ったので、報告する。

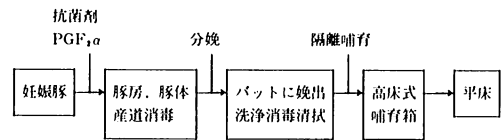
1. 試験方法

第1図に人工哺育の方法を示した。試験には、臨床的に健康な大ヨーク種6腹を供試し、計6群18頭を作出、人工哺育した。試験豚の給与飼料と給餌方法を第1表に示したが、飼料は代用乳以外すべてペレット化飼料を使用した。畜舎管理は、入舎時にシャワーを利用し、飼料、資材庫その他必要な箇所には、殺菌灯を使用した。また、舎内及び豚房は定期的に水洗、消毒し、清浄性の維持に努めた。衛生プログラムは、疾病の発生状況を把握するため、投薬を豚コレラ、豚円毒のワクチンのみとした。調査項目は、疾病の発生状況及び飼育成績とし、試験期間は、1986~'87年度の2年間であった。

2. 試験結果及び考察

試験豚の哺育成績を第2表に示した。育成率は88.9%と良好で発育も初生時にはやや劣るものの、5週齢以降急速な伸びを示し、10週齢では平均28.3kgに達した。次に肥育成績を第3表に示したが、30kg到達日齢が全体平均で73.9日、90kg到達日齢145.9日、1日平均増体重837.9gと良好な成績を示し、特に去勢豚の発育が顕著に優れた。また、最も期待された飼料要求率は2.71を示し、人工哺育の効果が十分に認められた。次に、疾病の発生状況について、臨床的異常は全例認めなかった。出荷時の抗体検査では、萎縮性鼻炎(AR)が7/16頭、ヘモフィルス感染症(H.P)が10/16頭に凝集抗体が証明された。抗体価の最高はARで40倍、H.Pで16倍であった。同じく細菌検査では、全例鼻腔内スワブを採材し、血液寒天培地、1%ブドウ糖加マッコニー寒天培地等を用いて特にARを重点に原因菌の検索を行ったが、有意菌を検出できなかった。病理検査では同じくARを想定して鼻の外形検査と第1臼歯前面で鼻を切断し、鼻甲介を剖検したが、全例異常を認めなかった。なお、病変としては1987年度当初に作出した3群5頭に軽度の寄生虫性肝炎が認められたが、水洗、消毒を繰り返した結果、その後の発生はなかった。しかし、これにより寄生虫の感染力が伺われると共に駆虫の必要性を痛感させられた。また、鼻甲介について特に病理組織学的に検索した結果、3例に限局性の軽度の細胞浸潤像を認め、何らかの微生物による感作が考えられたが、他の検査所見とも勘案して、現状では特にARを疑うものではないと判断された。以上の

成績より養豚の疾病清浄化に向けて、人工哺育の有効性が証明されたことから、今後実用化を目指してさらに検討を加えたい。



第1図 人工哺育の方法

第1表 給与飼料と給餌方法

飼料名	飼料成分		給与期間	給与方法
	TDN	DCP		
市販代用乳 A	113.0	22.0	~2日齢	3回/日
” B	113.0	22.0	~14日齢	2回/日
市販人工乳前期用	84.0	19.0	~体重10kg	不断給餌
” 後期用	79.0	16.0	~体重25kg	”
市販子豚用	77.0	14.0	~体重65kg	”
” 肥育用	76.5	12.0	~体重90kg	”

第2表 哺育成績

単位: kg

供試頭数	離乳頭数	平均体重	分婣時							
			1週齢	2週齢	3週齢	4週齢	5週齢	7週齢	10週齢	
18	16		1.1	1.8	2.7	3.9	5.7	8.1	14.6	28.3

第3表 肥育成績

区分	供試頭数	開始時		終了時		一日平均増体重(g)	飼料要求率
		体重(kg)	日齢(日)	体重(kg)	日齢(日)		
去勢豚	6	32.0	74.7	91.2	138.8	926.8	—
雌豚	10	31.2	73.5	90.6	150.2	784.5	—
全体	16	31.5	73.9	90.8	145.9	837.9	2.71